



天皇さま  
戦後五〇年  
『船乗り』(一)  
満豪開拓義勇軍を語る(一)

田中豊蔵  
谷口茂雄

瀬野尚憲



大原風景 金井直彦

# 天皇さま

瀬野尚憲

敗戦後間もなく、裕仁天皇は明治天皇にならって精力的に全国を行脚しました。この地方でも「御召列車」が通るとき、皆そろってお出迎えするよう市からの通達もあり、顔役たちもありがたいことと協力していました。駅頭での歓迎は市指定の御偉の方のみであふれ、皆礼装だったと聞きました。沿道で頭を下げ、あるいは手をふって歓迎したある農家の主婦が、帰りに、私のところへ立ちより、診察室へ入ってきた言葉が「天皇さまのお顔をおがんで涙がこぼれた」でした。いつの世でも最大の収奪の対象になつたのは農家でした。彼女も二人の子息が戦死していますが、彼女の心の中には天皇の名において召集され殺された息子たちの怨念は少しもないようみえました。とにかく天皇の顔をおがむだけで、総てが解消されたのかもしれません。昔はこの地方も青々と田がひろがっている全く

の農村地帯でしたが、農家の人はちはみな天皇支持者でした。天皇制が温存されたのも、一つには岸信介のいう「声なき声」に支えられていたのかかもしれません。農民は頑固なところがあります。私たちが云つたことに反論はしませんが、心中には頑として動かない一つの信念があるようです。それはいわゆるムラ意識に裏づけされたもので、日本文化の根幹をなしています。現在は可成り変わつたとされています。それでも天皇制肯定者が多数を占めています。

『週刊金曜日』という本多勝一氏らの編集による週刊誌があります。岩波の『世界』と同じく、そこはかとなく反共意識が漂っていますが、週刊誌的な興味もありますので引きつづき読んでいます。そのなかで「ねむの木学園ご訪問に際して」という当学園の教員の方の実名入り投書がありました。

「ねむの木学園」といえば宮城まり子さんで余りにも有名ですが、宮城まり子老いたりという感じを受けました。長くなりますが、この投書は現在天皇なるものの実態を生々しく伝えていますので、できるだけ忠実に引用させていただきます。

県や警察などの事前打合わせが再三秘やかに行われ、三月にマスコミを通じて訪問日程が公表されますと、学園全体をあげて「お迎え準備」が始まりました。数百円を費やしてカーペットが貼り替えられ、あらゆる壁や天井も塗り替えられました。各種団体からボランティアも参加し、職員は休日返上で頑張られました。四月に入ると警備が厳しさを増し、学園入りの際、職員や出入り業者は警官に対し許可証を呈示するよう命じられました。ご訪問当日、ホールでは子供たちと職員によるダンスが披露され、各教室で様々な授業が行われたが、そのいくつかは、見せることだけを目的とした、非日常的な、いわば演じられた授業光景がありました。

彼は、人間としての明仁・美智子両氏の人間性まで否定するつもりはない、むしろ間近かにみた二人の姿からは、穏やかで優しそうな紳士と淑女のカップルという印象をもつたが、そこに重大な落とし穴があると主張していました。今や天皇を「冷厳な神」とどちらの人は少なからうが、「敬意を表すべき特別の存在」とみる人は依然として多いだろう。

そのような存在の天皇が好感を持っている人間性の持ち主であればあるほど、指導者の「天皇陛下のために」という掛け声の下、国民が一致団結させられ、理不尽なことをも受け入れなければならぬような事態に陥る危険性が高くなるのではないか。三月から四月にかけてのねむの木学園は、まさにそういう事態に陥っていた。あの頃の学園長の姿が、集団的自衛権とか有事立法などといったキナ臭いことを云い出す政治家の姿と重なり、私は身の凍るような恐ろしさを感じるのであった。たしかに天皇・皇后のみならず、皇室一家は体制に協力して美事にその役割を演じています。マスコミでは天皇家批判はタブーになっています。そして「美智子さん」でなくて「美智子さま」でなければならないのです。にこやか

## 燎原

な皇室外交の裏に「ねむの木学園」の先生の投書のような事実が、あらゆる場所で演じられています。これを忘れてはなりません。いわゆる新京都学派といわれるグループのみならず、著名な多数の方がたも、日本文化の枢軸を天皇制においています。私たちはかつての天皇制ファシズムの実態を次代に伝える義務をもっています。過去の反省のない者は、必ず再び同じ過ちを繰りかえすと、昔からいわれています。

## ◇会員短信◇

常は立派なお便り有り難うござります。大腿骨を鉄に入れ替える手術を安井病院でしていただき、その後滋賀県百済寺町にある近江温泉病院で四年、続いて現在入院中の山科区小沢病院に転院、ようやく元のように元気になりそうです。でも、本当の元のようには無理、大切な器のように静かに歩かないといけない状態、これからも一生懸命頑張ります。

左京区 福森かずえ

私は昭和三年六月十八日（一九二八年）京都府船井郡世木村天若（今日吉町）に生まれました。父は湯浅嘉之助、母はたつとい、兄

## 戦後五〇年

## 満豪開拓義勇軍を語る（一）

谷口茂雄

目次

一 小作農の次男

「元気で行ってきます」

弟は男二人、女四人の六人兄弟でした。私はその中の次男で小さい時から

「お前は他所へ行くもんじゃ」と

言つて育つて来ました。

家は八反の田圃を耕作する農家

でしたが、その内五反は小作地、三

反だけが自作でした。殿田駅前の

地主さんに年貢を納めにいきました。

また天若の千谷の田圃は収穫量

が少く父はベタ引き（大型の荷車）をして、山から出した木材を殿田

駅まで運搬する仕事をしていまし

た。また、川所ですから、若い時

は筏の仕事にも出たことがあると

言つていました。

私も戦前、湯浅實太郎さんの牛

乳屋の牛乳配達と集金の仕事をし

ました。帰還直後も自転車のタイヤがなくパンパンの丸タイヤで悪

い土道を飛びあがりながら走った

ものです。田原から四ツ谷、そして上佐々社の奥まで行って帰ってきたものです。農家だけでは食えなかつたわけです。それで私は小学校高等科を卒業すると満豪開拓義勇軍に行くことになりました。

父の弟にあたる園部町宮町の叔父の長男が、昭和十七年に義勇軍紙がきて「君もこい」という、父がいとこの事を話していましたので、私も義勇軍に行くのだという噂がパーッと広がりました。

当時、世木村小学校の井尻幸一先生が

「君、満豪開拓義勇軍に行つたらどうか」と推められました。

私は「どうせこの村にはいられない身分だし……」と思い、心が動きました。

当時、満豪開拓義勇軍のきれいなボスターも出ており、特に「三年間の訓練期間を終わると、開拓団に入り一人で自分の土地が十町歩もらえる」という宣伝がされていました。

私達小作人の次男としては大きなか魅力でした。私は胸をふくらませて、満州に行くことを決意したのです。

## 二　『元気で行つてきます』

昭和十八年三月十八日、全校生徒が校庭に集まっています。私はこの生徒の前に立って義勇軍に出発するあいさつをしました。校内では同じ組の湯浅悦治君があいさつしました。私は井尻幸一先生に原稿を書いてもらい校庭にならぶ全校生の前であいさつしました。

ところが家を出る時が大変でした。母親があまりの心配で脳震盪を起してしまって倒れてしましました。祖母がいましたが、出発の時、私は

「お婆、お茶」

といって茶碗を差し出すと、

「お前を見るのもこれでしまいか」と涙をはらはらと流しました。私は泣いたらあかん、泣いたらあかんとこらえていました。

あとで聞いた事ですが、隣のおばさんも近所の人も

「あんな小さい子が『元気で行つてきます』と家の前であいさつをして……本当にやつていけるのやうか……可哀想に……」

と言っていたそうです。

私は十一騎になつていましたので、それほど悲しいとは思ひませんでしたが……家を出て殿田駅から汽車に乗つて京都に向いました。

殿田駅では五ヶ荘小学校の方から来た人と一緒になりました。駅の構内は一杯です。全校生徒が見送つてくれました。本当に『歓呼の声』に送られて出発したのです。

そして園部公園グランドに集結し船井郡で一個小隊が編成されました。たしかその時の写真があったのですが今は見当たらません。そして京都で一泊、京都四二中隊が編成され、記録にも残されていますが二八五名が東京へ、上野で常磐線に乗りかえて赤塚駅につき、河和田分所に到着したのです。

の土田潔先生、教練の多富先生、農事担当の和泉先生、經理担当の津田先生らのもとに訓練に励みました。

日課は起床、点呼、礼拝、食前作業、朝食、農作業、昼食、農作業、訓練と、まさに来て見てビックリ、実にはげしい訓練でした。

一寸でも油断していると「どう…、パン」と中隊長の鉄拳が、飛んで来ました。福知山弁で「何をしているのか」と言うのを「どうオ…」と言います。「どう…」と言ったとたんに「パンパン」と平手が飛んできます。たった十五才や十六才の子供を遠慮なしになぐるのです。食後、中隊長も反省して隊誌に「喜怒哀樂—ドウパン先生」と書いておられます。それはそれは酷い体罰でした。

和し

あつぱれ  
あなたのはし

あなたのはし  
あなたのはし

これは加藤寛治所長が考案したのでしょう。大分、神がかりな行事です。と称えるのです。そして大和体操（やまとばたらき）というのもあります。

引きの飯食器、底に海軍のイカリの印が入ったもの、おかげの皿食器と汁食器、湯呑の四つです。御飯は一杯切り、子芋の細かくぎざんだものが米飯の中に一杯入っています。間食には万頭（マントウ）日本のむしパンです。水は飲む

いないのでわかして飲むのですが……もう腹がへってへって…食べ盛りの少年達は空腹にたえかねました。そして「屯墾病」ホームシックにかかるものが多かったのです。

軍事教練はありましたが、木刀だけでした。農作業は芋の床をつくります。そして点呼集合があり、最初に礼拝というのがあります。宮城と伊勢の皇大神宮に礼拝をするのです。ついで義勇軍綱領を唱

内原訓練所は広い松林の中になりました。皮葺の丸い屋根、日輪兵舎が沢山並んでいて、多くの隊員が訓練に励んでいました。

所長は加藤寛治という立派なつりひげの人でした。私達の中隊は福知山石原出身の大槻照雄という学校の先生が中隊長でした。教学

朝、起床ラッパがなります  
起きろ起きろ、皆起きろ  
おきなきや班長さんに  
しかられるウ…

というやつです。それと同時に腹わたをえぐるような太鼓が鳴りひびきます。そして点呼集合があり、最初に礼拝というのがあります。宮城と伊勢の皇大神宮に礼拝をするのです。ついで義勇軍綱領を唱

私達はこゝで二ヶ月の訓練を終

えて渡溝するのです。身体検査ではねられるものが多かったです。しかし私達は広漠たる満州で土地をもらい、日本の国威を宣揚するのだと希望に燃えていたのです。

#### 四 はるか広漠の地

昭和十八年（一九四三年）五月十八日、内原を出発した私達は、東海道線を下って伊勢皇大神宮に参拝、それからなつかしの京都へ、京都府庁に行き更に御所で壮行会が行われました。この時の写真があります。全員が義勇軍ののぼりを先頭に鍬の柄をかついで行進しています。京都市中の人々は勿論、私達の親も親類も面会にきてくれました。面会は東本願寺でしたが、ぼたもちや土産も沢山持つて来て呉れましたが胸が一杯で食べられません。そして今度は京都から新潟へ。新潟港から夕方に出航。佐渡ヶ島が波間にうっすらと見え、二日三晩か、つて朝鮮の羅津に上陸しました。

私達は羅津で一日休養すると汽車が北上し牡丹江から北の勃利駅につき、更に四十キロばかり東に入った所が私達の訓練所でした。正式名称は、勃利県勃利青年義勇

隊訓練所といい、私達は第一大隊第一中隊（大槻中隊）の大茄子訓練所に到着したのです。

こゝは既に開拓された広大な土地で桃山と言う山が近くにあり、

なだらかな丘の続く土地でした。農場は百米づつに区切られてありました。こゝに私達の三ヶ大隊が駐屯し大隊本部、武徳殿、その横

に兵舎が二つ建っていました。手元にその写真があり、隊員たちが高梁の手入れを行っています。

満蒙開拓義勇軍の制度は昭和十三年（一九三八年）に作られ、日本各地から混成大隊が出ていったのですが、神吉（八木町）でも谷口利雄さんなどが行つており、昭和十六年に初めて京都中隊が編成され黒田巳之助さんも参加しました。それが第一次、第二次と動員され、昭和二十年の終戦の年には、第五次の京都の中村中隊が出て終わりになつているのです。

桃山の中腹には桃山神社が創設されました。遠い所に満州人の村もありワニコ河の近くには水田もありました。真種栽培をやり、早稲種で背丈の短い「ひだぼしこすり」といわれる稻がつくつてありました。私達も作業に行きましたが、稗との見分けがつきにくか

ったものです。

開拓地の作物は包米（ボーミー）なんばです。高粱（コーリヤン）、

馬鈴薯、大豆、白菜、大根、人参

でした。農機具としてはあまり使

われていませんでしたが、トラクターがありました。ハローを引いて畠をつくります。二頭引きの馬

で耕耘するのです。

生産したものは、自分達の自活のための食糧ではなかつたかと思

います。関東軍に運んだか剩余が

あつたか、もう一つ定かではありません。私達はとにかく腹がへつ

ません。私達はとにかく腹がへつ

てへつて往生してきました。土地

は肥えていたよう思います。し

かし、冬は凍てがきつくて大変で

した。大豆でも土の上にさやつき

の大豆を置き、石のローラーを馬

に牽かすのですが、土地は凍ててパンパンです。

日課は内原訓練所と同じように、起床、点呼、礼拝、食前作業、朝食、農作業ということです。冬は薪の運搬があります。関東軍の教官による軍事教練もありました。武器はあまりなかつたようでした。

大隊本部には営門があり、歩哨が立つて銃剣を付けていました。兵舎の入口には銃架がありました。銃はありません。あとになって関

東軍から兵隊がきて、敵の戦車がきたら戦車目がけて突進し、爆雷をなげつける自爆の訓練をさせられました。

寒さは聞きしに勝るもので零下

三八度～四〇度、防寒帽を着ていて涙まで凍りまづげにはツララ、馬でも口元にツララが下がります。

兵舎の中はペーチカやオンドルなどがありますが一旦外に出ると大変でした。外では重労動、夏にはブトとアブで顔中ブツブツができました。舎内はのみと虱の巣であります。兵舎の入口に虱退治の平釜があり湯をわかして衣類をたいて退治しましたが、卵は仲々死なないのです。風呂はありましたが、流しへ水でバシバシ、ゆっくり暖まつているような余裕はありません。風呂なんかに入らず寝た方がましでした。それに発疹チフスが流行しました。体の弱いものはバタバタたおれました。（以下次号）

#### ◇会員短信◇

貴重な聞き取りを拝見しました。これをさらに資料で裏付けて、民衆の運動史を豊かに語り継いで下さい。

大和高田市 酒井 一

『船乗り』(二)

田中豊蔵

(三) “北はシベリヤ  
南はジャバよ”

(前号から続く)

私は入港と同時に船長や運転士に「元の日本人町のマレイ・ステレスにやらしてください」とたのみました。

運転士は「五、六時間すると出

港するから早く行け。お前のことは船中の皆がよく知っている、早く行け。車に乗って行くんだぞ。夫長に借りて行くのだぞ」とせき立てられました。一人で行くのは心もとないので、カーペンター君について来てもらいました。二人で勇敢に出ていきました。

来て見れば、町は昔の面影はあとかたもなく、淋しい町になつています。日本人会長に会いますと、雇主は彼女たちをジャバ、ス

マトラに売った。そこで働いていると思う」というのです。

シンガポールの唐行きさんは、スラバヤから買い物手が来て話がまとまり、皆んな散々になって売られていったとのこと。

私は折角、苦労して持つて来た手紙を渡せずガッカリしました。残念だが如何とも出来ず、その手紙をもって急いで船に帰りました。

船長をはじめ船内の人々に厚くお礼をいったのです。

船長は、添書をしてジャバ国営の定期船にたのみ、その手紙がジャバのスラバヤにとどく様に手配してくれました。船長がこの様に力を入れて下さったのは例がありません。船内でもこの話でもち切りでした。

平明丸は出港、次はセイロン島のコロンボです。船は無事にボンベイにつきました。

私達はボンベイ港で五、六日で

綿を積込んで、船は一路日本へ帰国の途につきました。

帰りにシンガポールで食料品・水・石炭を補給します。船長が「田中、話があるから、船長のルームに来てくれ」というのです。私はルームに伺いました。

「ビルマのラングーンで出した手紙は、ジャバの定期船の船長が受取つて、ジャバ・スラバヤで調べることになった」との事です。

私も入港すると直ぐジャバ・スラバヤに向けて手紙を出せる様に準備をし、表書をオフサーに書いてもらいました。それを、船に乗つているボリスマンにたのむと、彼は心よくあづかってくれました。

私は無事に本人の手に渡るようとに祈つておりました。船長の添書がたよりです。

本船は間もなく出港して日本に向い帰国途についたのです。十二日間かかって神戸港に入港しました。船は神戸港の第三突堤に碇泊しました。倉庫が並んでおりました。私は又彼女の生家に手紙を出しました。

彼女はジャバのスラバヤに売られた。その後で九州の新聞で分かりました

が言つてくれたこと、事こまかに正直にかいて出したのです。

生家の方にも元のかかえ主から手紙で知らしているのでしようか。二、三日たつても返事は来ませんでした。私は心配していました。

私は二度目の手紙は名古屋港からも出しました。それでも返事は来ません。前回は泣いてたのんだのに、今度はどうなんだと思いました。

二、三日後、船は北海道の室蘭に向つて出港です。そのうち私達の船はアメリカに行くことが正式に決まりました。

思い出の南洋行きはグッドバイです。

スラバヤにシンガポールのはなやかな時に芸者でスラバヤに来ている人：彼女は遊女の中でも美人でスラバヤのお玉か、お玉のスラバヤかといわれた売れっ子でした。

後で九州の新聞で分かりましたが、彼女は自分も苦労しているが、年とった遊女が病氣したりすると、彼女たちを世話していることが新聞に出していました。私もトンボの尻を切つた様な状態です。これが唐行きさんの一生です。

## 燎原

## (四) アメリカ航路

大正十年の春、私達の平明丸は北海道室蘭港で石炭を積込んでいました。この船の燃料です。この船は一路アラスカ沖を左に、太平洋の真中をハワイ群島に向けて進みます。

波は荒く低気圧の接近で大荒れです。遭難した船があり、SOSの信号が無線電信で入ります。オペレーターが知らしてくれます。平明丸は荷物を積込んでいませんので空船。木の葉の様にローリングします。

船はフルスピードで台風の圈内を脱出しました。翌朝には波は治りました。船員一同やれやれと安心しました。まもなくカナダ・バンクーバーの港です。バンクーバーの水先案内人、パイレツツが来船してきました。

船長、一等チフサー、二・三等チフサー、コウダーマスターは命令通りに動きます。港の入口には小島があり、人家もあります。日本人が五、六人日の丸の旗をもって迎えて呉れました。私達は案内されて無事バン

埠頭に碇泊しました。

カナダ大平汽船KKのエンプレス・ジャパン・ロシャ号は四万トンの客船です。カナダのバンクーバーから横浜港まで五日間で通います。

私達の日本船は二週間もかかります。アメリカ船も日本船もとも歯が立ちません。アメリカ人も本土から隣のバンクーバーまでいき、大平汽船に来るのです。日本船では大力打が出来ません。それで日本の新造船はスピードを早くする様にしました。それでも七、八日はかかるのです。

エンプレスにはかないません。やはり技術が違うのでしょう。日本人でも急ぐ外交官や大企業の人々は、横浜港を出港するエンプレス号にのります。カナダ太平汽船KKの後には当時世界一の造船国英國がついております。

私達の平明丸は二日で積込を終つて、隣のアメリカのシアトル港に入りました。日本行きの荷物やポーランドから来ている材木を満載しました。シアトル港は北米で一番大きな港です。各国の船が入港しております。

アメリカ合衆国は禁酒国でした。私達は案内されて無事バン

は太平洋艦隊の旗艦ニューメキシ

コが碇泊していました。

税関のポリスマンが厳重に警戒しています。脱船して船員は石油缶に洋服と下着を入れてそれを浮袋にして海に飛込みます。岸壁や橋の丸太にはよく貝がはりついています。

海中に飛込んだ人は、よく泳げるのは向う岸につきますが、不十分な人は志なればにして水死してしまいます。

朝早く水死人を見付けると賞金をもらえますので、早朝の桟橋に水死人をさがす人でにぎわっています。私は志を立てて、アメリカにいき、シアトルに上陸したいのですが、あまりに警戒が厳重なので、降りることをあきらめざるを得ませんでした。逃げたら船長が五十ドル、百ドルの罰金です。

廿一才になると軍隊にとられますが、兵事課の方で厳重に取り締まっています。この点もあって、私はアメリカ行きをあきらめたのです。

朝シアトル港を出た船は一路、日本の横浜港に向っています。

ボーランドの長尺のメリケン材木二十呎をワイヤーでつないで引つけます。波静かな航海であるよ

うにと祈りました。

あと、二、三日で日本というところで、船は台風に出くわしました。引きワイヤーが切れて十五本程の材木が海中に流されてしまいました。

ようやく横浜港に着きましたが、海難届を出しました。ワイヤーを取りはずし、引船が残りの材木を材木場に持つて行き、船は突堤に横づけにされ、倉庫に納めます。

私は京都へ帰ろうか、父母兄弟のことも頭にうかびます。会いたいなあ……との思いで一杯です。北米行きも志なればに水泡と帰らし、残念でした。

南方のことも忘れません。手紙はとどいているだろうかと気になります。二ヶ月の月日も過ぎて手紙は一向につきません。鹿児島の家からも便りはありません。

「人の心はあるにならんものだな」と思ったものです。

## (五) 海員組合へ

横浜港をあとにした私達の船は

神戸港に帰りました。一日半です。港の中程のブイに船をつなぎました。

時は大正十年八月初日でした。

日本は不景気でした。

尼ヶ崎の製鉄所、西の宮製鉄所、神戸川崎造船所、ダンロップKK、中小マッチ工場等は労働争議の真最中でした。

平明丸は、シベリヤ、ウラジオストックに行くようです。前の世界大戦でロシヤの捕虜になったトルコ軍人は、シベリヤで強制労働をさせられていきました。このトルコ軍人を万国赤十字社の手で本国に帰国さすべく、本船は因島造船所で客室をこしらえるのです。その間、船員を少なくするのです。

私は京都が恋しくて一度帰りたかったので下船を申し出ました。水夫長は「別に下船せんでもよい」となだめられたが、一度、父母兄弟に面会したいので海事局に手続きをして下船しました。

私の他にも外国船に乗船していき上級甲板部員も下船しました。ファスト・セイラー・マンは、日本との争議に関心をもって居りました。

「田中、お前は若い青年だ。このストライキをよい勉強にせ

よ。儂は海員休養所のボーレンに泊まりデモに参加する」

と言いました。

私もアメリカ行きが永年の夢でしたが、これが破れましたので、海員組合のストライキに参加しました。上級のセイラーマンに教わった通りの道を進むことを心に決めたのです。

「三年前お世話になった神戸市東川崎五丁目二七五の山岸栄一郎方に泊まります」

と話して、私はストライキに参加しました。

私は、京都に帰れば二度と神戸には来られないかもしません。

私は帰るのをやめて、毎日闘つている争議団に参加をしました。

これが私の労働組合運動の第一歩です。

毎日同じ時間に参加して来ますので顔見知りが出来ます。指導者は総同盟の木村錠吉さんでした。私が船員であるのに休んでデモに参加するので感心して

「若いの、よい勉強になるぞ、ガンバレー」と私を激励して呉れました。

八月廿日頃、労働争議の真最中川崎造船所の重役は、東大出身の男で、総同盟会長の鈴木文治と同

期生だそうで、話は妥協になりました。そして争議は惨敗に終ったのです。

争議団の鈴木文治、松岡駒吉、村尾薩男、金正米吉、藤岡文介（後に県議になる）などは右派でした。

最後まで争議のため力をつくした青柿善一郎は川崎造船所の工員でした。後、労農党で作家になりました。

そして組合は分裂し、私は評議会で闘う様になったのです。（以下次号）

#### ◇会員短信◇

当時全体像も知らず、ただボボとして動いていたのです。いま『燎原』を見て、あのことはこれだつたのかと思い当たることとなり、理解が深まったことを感謝します。

東山区 源 照子

昨年七月一五日テレビ大阪に出演、戦後五〇年記念番組として、「エスペランツにかけた反戦平和の旅」という題で語りました。

堺市 宝木武則

#### 編集後記

新年度の会費・誌代の払込み次々入金しています。有り難うございます。

本号の発行が時期遅れになりますので、広告掲載は来春号に回させていただきたく、ご了承のほどお願い致します。

実は、これまで会や本誌の事務局を一手に引受け、献身的にご尽力下さっていた湯浅貞夫氏、そして奥田修三氏が今年になって相次いで体調を崩され、二、三ヶ月入院加療されることになりました。

その間、天野が本誌の編集に当たり、発送は加藤法律事務所に援助をお願いしました。そのような事情で不行届が多くあるかと思いつますが、暫くの間ご海容下さるようお願い致します。（天野記）

会および本誌については、当分の間左記にご連絡下さい。  
〒六一六 京都市右京区宇多野  
御屋敷町十一 天野和夫  
☎〇七五一四六四一四一一〇